

<Art & Métier>を標語とするアルテス・リベラレス

—東京電機大学理工学部における実践報告—

石 塚 正 英*

Artes Liberales with the slogan of <Art& Métier>

ISHIZUKA Masahide*

キーワード：教養教育，アート，メチエ，スクラップ&ビルド

1. 倫理観溢れる<Art & Métier>宣言

諸大学において教養教育の再建が求められて久しいですが、2016年4月1日付で、私は、東京電機大学感性文化化学研究室を事務局とし、総勢14名で、非営利的教育事業体「アルテス・リベラレス開発研究所 (Artes Liberales R&D Institute)」を設立しました。全所員が若手研究者で構成される本事業体では、<Art & Métier>を標語とし、倫理観溢れる宣言を、以下のように謳いあげました。

Artとは「技術・芸術」、Métierとは「匠の技・職人芸」です。あわせて「技と芸」になります。技術や芸術作品には、それを産み出した人の精神、心情が縋い交ぜになっているということです。ところで、すぐれた技術や作品を保証する基準ないし条件は何でしょうか。それは利便性と安全性、経済性だけではありません。もう一つ、倫理性があるのです。それは人（製作者）と人（消費者）とのインタラクション（=相互作用）を通じて醸成されます。

あれから6年が経過しました。その間に幾つかの変更が生じ、2020年3月をもって本研究所は活動を休止しています。けれども、このままの状態を放

置することは芳しくありません。よって、東京電機大学理工学部を拠点に展開してきた実践をいったん総括し、活動にけじめをつけることにしたいと思います。なお、本稿は以下に記す拙稿の続編にあたります。「人智の根源を陶冶するリベラル・アーツと汎人間力を育むジェネリック・スキル」(『東京電機大学総合文化研究』第14号、2016年12月)。

2. 実践報告

本研究所は、創設当初、以下の業務に携わりました。①綾瀬市の株式会社ブリタニア（高桐学園予備校）との連携（日本語表現力講座開設）、②上越市のNPO法人頸城野郷土資料室との連携、③秩父市の笹久保氏を軸とする芸術運動との連携、④台東区のポンピン堂の伝統文化（江戸小紋）継承活動との連携、⑤青山学院ヒューマン・イノベーション・コンサルティング株式会社（HiCON）との連携など。

①については、2018年2月に以下の業務委託契約を結びました。受験講座「日本語表現力」プロジェクト業務のうち教務部門、同じく「日本語表現力」2020年対策業務のうち教務部門。本業務は、知識偏重の大学受験・大学教育を抜本的に改善する動向を見据えて立案されました。

*理工学部情報システムデザイン学系非常勤講師 Part-time Lecturer, Division of Information System Design, School of Science and Engineering

2022年現在にあっても、例えば文部科学省の大学分科会（第168回、2022年6月22日）配付資料には以下の記述が読めます。「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」に示された方向性」として、「普遍的な知識・理解と汎用的技能を文理横断的に身に付けていく」。ここに記された「汎用的技能」は、本研究所が2016年に告知した汎人間力を育むジェネリック・スキルに比肩されます（前掲拙稿参照）。

②については、私が理事長を務める関係からも、相互の連携が堅実に保たれました。主要な企画はセミナーハウスの構想です。以下に詳しく記しましょう。まずは目的です。

「NPO法人頸城野郷土資料室は、くびき野に文化交流センター・セミナーハウスを設置したい。目的は、ブルーノ・タウトほか外国人から見た日本文化の評価を整理し、また岡本太郎ほか外国にわたった日本人による日本文化の再発見を跡付け、その成果を新たな国際文化交流の豊富化に寄与せしめること、あるいは、くびき野から21世紀に求められる地域文化交流のあり方や意義を提言することである」。

次に企画書「くびき野に文化交流センター・セミナーハウスをドナルド・キーンと富本憲吉を軸に」から引用します。

「★ドナルド・キーン（1922～2019、文化勲章）は、ある雑誌に民芸運動を批判する記事を掲載したところ、それを讀んだ富本憲吉（1886～1963、人間国宝、文化勲章）は内容を褒めてくれたうえに、作品を一つ贈ろうといわれた。（キーン「遠慮の名人 私の後悔」朝日新聞 2007.11.01 付）。富本は、美術工芸に造詣の深いバーナード・リーチと交流したが、そのリーチは柳宗悦の民芸に理解を示すなど、日本の伝統文化を重んじた。また富本は、ウィリアム・モリスの影響を受けたが、そのモリスはアーツ&クラフト（美術工芸運動）を推進し、『指輪物語』の著者トールキンに感化を与えた。源氏物語を筆頭に日本文化を研究するキーンは、同じく源氏物語など日本文化を研究したアイヴァン・モリスと交流したが、日本では川端、谷崎、三島らと交流して文芸評論を展開した。富本もキーンも、ともに新潟県に関係がある。富本は糸魚川市（鬼舞）の伊藤家（廻船

問屋）にしばしば逗留した。キーンは柏崎市の株式会社ブルボンにドナルド・キーン・センター柏崎を置いた。

★NPO 法人頸城野郷土資料室およびアルテス・リベラレス開発研究所（東京電機大学石塚研究室）は、伊藤家とブルボンを結んで、くびき野に文化交流センター・セミナーハウスを設置したい。目的は、ブルーノ・タウトほか外国人から見た日本文化の評価を整理し、また岡本太郎ほか外国にわたった日本人による日本文化の再発見を跡付け、その成果を新たな国際文化交流の豊富化に寄与せしめること、あるいは、くびき野から21世紀に求められる地域文化交流のあり方や意義を提言することである」。

以上の準備を前提に、アルテス研メンバーあてで、2017年1月29日、以下の通知を行いました。

「本日、上越市と糸魚川市でアルテス研の種まきをしてきました。午前中に、江戸時代から北前船で財をなした鬼舞（現糸魚川市）の伊藤家当代主克助氏とご自宅で会いました。午後には、ドナルド・キーン・センターを誘致した柏崎市の株式会社ブルボンのセンター事務局長染谷晃氏に拙宅で会いました。別紙の案内文を示して説明し、意見交換をしました。双方とも、とりあえず私の説明を聞き、ともに遠大という印象を受けられたようですが、趣旨はおおよそ理解して戴きました。まずは成功です。伊藤氏は、第一にご自宅を国の文化財とし、そのうえで条件が合えば我々と連携するといった感じでした。染谷氏は、源氏物語をはじめとするキーンの研究成果を踏まえたセンター紀要を、との私の提案に関心を示しておりました。とくに、ブルボンについてはアルテス研による紀要の委託編集を当面の目標とし、第一号は「キーンの源氏物語研究」といった特集を企画できればと思っております。本企画はしかし、アルテス研および頸城野郷土資料室のマンパワー不足が主要原因で、実施には至りませんでした。

③秩父市の笹久保氏を軸とする芸術運動との連携、④台東区のポンピン堂（屋号「更銚」）との伝統文化（江戸小紋）継承活動ですが、③は計画段階でストップしています。④は黒木朋興事業本部長を中心に、以下の経過をたどりしました。

2016年2月16日、黒木・石塚ほかアルテス関係者がワークショップに参加しました。伝統的な型染

めの「色挿し」（絹布に鹿毛の刷毛で彩色をする工程）を体験しました。当日NHKの取材が入り、後日放映されました。そのほか、石塚研のゼミ生（3年生）、紺野太陽さんは、ポンピン堂を研究現場として卒業研究「型染を事例とした伝統文化普及に関する考察」を始め、次のように認識するに至りました。「型染め本来の良さはこれまでの長い歴史を持った染め柄や、ファストファッションなどが主流となった現在では簡単には作れない精巧で綿密な柄にある。これら技術力がなくなってしまうと、型染めは伝統文化としての役割以外に存在価値はなくなってしまうだろう。手間をかけた商品を手にとってもらうためには、染めを施す対象をカバンや財布のような高価格で手にしてもらえらる商品に移して行くことが必要であり、これら取り組みは根本的問題である型染めの認知度向上にも繋がる」。その過程で、アルテス研とポンピン堂の連携を確認し、型染の紙型のデジタル化など、幾つか企画を話し合いました。

⑤は蔵原大開発本部長が窓口となり、地域での就労斡旋事業（「ジョブ・カードセミナー」プロジェクト）に乗り出しました。

3. リベラル・アーツの革新

さて、そうした活動を経てはつきりと意識されるに至った問題を考えましょう。それはリベラル・アーツの革新です。本研究所設立に先立って、私は2010年設立の「リテラ言語技術教室」専任講師の岡本陽介氏と共著で「言語技術教育の概要と実践」（『東京電機大学総合文化研究』第10号、2012年12月）を公開しました。「教育の機会は隔々にある。どのような形であれ、子どもたちの教育に携わっているのであれば、言語技術の観点から成長を促すことは可能である」（11頁）。

言語活動を指して「学習」と評価する傾向があるものの、それは教えているのでもなければ教わっているのでもないです。人間として生きている証であり、習うより慣れる、の実践であるわけです。昨今、大学教育が教養教育の場でなくなった、という嘆きが聞かれます。そうだとすると、他にその場を求めて何か見つかるのでしょうか。前出の文部科学省大学分

科会は、「総合知の創出・活用を目指した文理横断・文理融合教育」を掲げます。さて、幼児期に「文理」の区別はありませんし、大人とて、Do It Yourselfの日常生活にそうした観念は稀薄です。むしろ、生活上の苦手意識はあってしかるべきで、それを問題視するのはお門違いというものです。また、「総合知」の具体例は何でしょうか。それもまた、言うは易し行うは難し、です。

リベラル・アーツの革新、それは教室での勉強をデスクワークとし、社会科学見学などをフィールドワークとするならば、双方の有機的連携の先に、その2枠の解体として見えてくるでしょう。文化の担い手こそが文化を探究できるのです。身につける知識や技術は、能力開発とかスキルアップとかで身心を豊かにするのではなく、思ってもいない方向、見たこともないフェーズに身心をバージョンチェンジする、という発想をもつことです。

教養教育は人格形成だとして、人格のコア、すなわち形成主体の自己（本質）は永遠普遍と思う、それが躓きの石なのです。スクラップ&ビルドは人間形成、いや人格（の解体）にも妥当するのです。「総合知」でなく連携し連環する知が肝要です。身体と精神、自然と人間、世界と地域、過去と現在、それらは優劣なく相互に連環し、諸学（専門）は相互に連環しています。地下水脈で接触しています。それを私は「歴史知」（通時的）あるいは「身体知」（共時的）と呼んでいます。前近代に起因する知（経験知・感性知）と近現代に特徴的な知（科学知・理性知）を時間軸上で連環（in-cycle）させるのです。あるいは、感性知と理性知を両極にして相互に往復運動をする、両者あいまって成立する知的パラダイムを構築するのです。これこそが人類史の21世紀的未来を切り拓くリベラル・アーツの革新なのです。

4. 今後に托される課題

文理一体不可分の概念・領域へのスクラップ&ビルド、これは、一見、学問が元来哲学として一つであった時代にもどる印象を受けますが、そうではありません。一度細分化された諸領域ないし諸学問を前提として、その上に新たな連環的科学の領域をうち立てようとするものなのです。応用レベルでの連

携でなく、基礎理論からの連繫を特徴としております。生態心理学、人間科学、身体科学などがその先駆の代表と申せましょう。この類型概念こそ、本事業体で導入したい概念・領域の一つです。

さて、以下では教養教育や文理複合でなく、生産労働の現場における老若男女連繫、社会的有用労働と家事労働の現場に目を転じ、起承転結の「転」として説明します。それは19世紀前半フランスの社会思想家シャルル・フーリエの「ファランジュ」という社会組織です。それは19世紀の農業社会の基本単位で、平均して数十人からなります。

朝起きると第一に、牛馬の世話と馬小屋の掃除があります。大人であれ子どもであれ、その仕事に向いている人がチーフです。動物が嫌いな人もチーフに従って作業します。あるいは子どもたちからなるチームが並行して作業にかかります。次は朝食の準備と片付けです。その仕事に向いている人がチーフです。その支度が嫌いな人もチーフに従って作業します。次はその日のメインの仕事である麦刈りです。その仕事に向いている人がチーフです。その仕事が嫌いな人もチーフに従って作業します。夕飯時になるとその仕事に向いている人がチーフです。その仕事が嫌いな人もチーフに従って作業します。イブニングの団らんでは、それぞれに自由時間を過ごします。そこで幼時からの生涯教育が相互的に達成されます。すべからず専門分化や分業が現れない。

ファランジュでの仕事は、いわば“遊びとしての労働”です。みながやりたい仕事を仕切る。でも“協同としての労働”です。やりたくない仕事でも助け合いながら一緒に果たす。生産の計画、調整、対外的な価格決定のために協同局を設置しますが、生産したものはそのファランジュ成員が自由に処分します。ファランジュ単位で、土地は共有ですが労働用具と生産物の私的所有は存在しているのです。

私は、未来の教養教育に、このファランジュはモデルになると考えています。社会内に特別の権限をもった人はいない。労働に老若男女の区別がないし、家事労働がないので、それを根拠とする子どもや女性への差別は起らない。労働は協同ですが、その他の文化活動・教育活動は個別連繫的です。ゲームや音楽、朗読などのインストラクターに対しては、協同局が価格を決定して報酬を支払います。

ファランジュの「転」はそこまでとし、あらためて今後に托される課題についてさらに考えます。

『日本の科学者』第57号(2022年7月)は「現代を生きるための教養教育」特集ですが、その「まえがき」(長野八久)にこう記されています。「現在においては、社会だけでなく、自然についての認識も必須の教養である」。「自然や社会についての知識だけでなく、それらの運動法則、発展法則をも身に着けるべきであることを強調しておきたい」(2頁)。

最初の引用文は、なにも近代にかかわるものでなく、前近代からの申し送り事項でしょう。問題は後の引用文です。これを「強調」しすぎると、文理分離といった元の本阿弥にもどってしまうのです。

狙いは文理一体不可分の概念・領域の相互連環です。繰り返します。これは、一見、学問が元来哲学として一つであった時代にもどる印象を受けますが、そうではないのです。一度細分化された諸領域ないし諸学問を前提として、その上に新たな連合的複合的科学的領域をうち立てるのです。応用レベルでの連合・複合でなく、基礎理論からの連合・複合を特徴とします。私は先ほど書きました。文化の担い手こそが文化を探究できる、と。ファランジュのチーフとそのメンバーをみて下さい。ある現場では誰もがチーフであり、またある現場では誰もがメンバーなのです。「自然や社会についての知識だけでなく、それらの運動法則、発展法則をも身に着ける」とは、人々が自然や社会の中で生活を担う、だからこそ自然や社会を探究できるのです。「知識」だけを「身に着ける」という発想自体をスクラップし、その連環をビルドしていくことです。この類型こそ、本事業体で導入したい概念・領域なのです。ホモ・カルトゥス(農をする存在)たちの「小農の権利宣言」(国連、2018年採択)の精神です。

しかし、本事業体は、もっか休眠中です。その最大の原因は中心人物だった蔵原大氏の急逝(2020年2月)です。また、東京電機大学退職(2020年3月)後にあつて、私自身の事務局再建が進んでいないことです。さらには、長引くコロナ禍の影響があります。今後の組織運営は、事業体を担う新たなスタッフを獲得できるかにかかっています。★参考: オンライン勉強会「現代社会を生き抜く教養教育」報告(『さいたまつうしん』202号、20221220)